ももとハニーシー

モモはルーシーがきらいです。
モモが小さなころ、この家にやってきたときから、
ずっとルーシーはいじわるなんです。
耳をひっぱったり、いきなりとびついてきたり。
おいかけっこがだいすきなルーシー。
ルーシーをみつけると、モモはすぐ
にげることにしています。

モモはおひるねが大好きです。
ぽかぽかあたたかなまどぎわが、
モモのお気に入りです。
そっとルーシーが近づいてきます。
庭からとってきた草で、モモのはなをこちょこちょ。
びっくりしてとびおきたモモは、あわててにげました。

「だからあいつはきらいさ」

ルーシーがじゃまをするので、
モモはゆっくりおひるねもできません。

モモはお花畑も好きです。
ちょうちょやモグラは、かっこうのあそびあいてです。
チューリップも大好きです。
風にゆらゆらゆれているのをみると、
つい手がでてたたいてしまいます。
モモがチューリップであそぶと、
ルーシーがおこっておいかけてくるので、
モモはわざと花をちらしてはにげました。

「いつもいじわるするからおかえしだ」

あるとき、モモはびょうきになってしまいました。
いやがるモモを、パパとルーシーは車にのせて
びょういんへ行きます。

「ここ、へんなにおいがする」

あたりをみまわすよゆうもなく、
口をあけられ、うでにチクリ。

「いたい、いたいったら！」

ルーシーがなきだしそうなかおでみています。

「なきたいのはこっちだ」

モモはふくれっつらのまま、その日はかえっても
ごはんもたべませんでした。

そのよる、ルーシーはモモといっしょにベッドへ入りました。
せまいふとんにぎゅうぎゅうで、
モモはいごこちがわるいったらありません。
おまけにルーシーはなみだでくしゃくしゃのかおを
すりよせてくるんです。

モモは何度もぬけだしますが、そのたびルーシーに
ベッドへもどされてしまいます。

「モモ、いっしょにねるの」

「いやだよ、ルーシーとなんか」

しかしそのうちつかれてしまい、気がつくとモモは
ルーシーのとなりですやすやねむっていました。

2、3日もすると、モモはすっかりげんきになりました。
パパがごほうびにいろいろなおもちゃを
買ってきてくれたので、モモはおおよろこび。

ルーシーはおもちゃをつかうのがじょうずです。
このときだけは、モモもルーシーと
なかよくあそんでしまいます。

おもちゃにあきると、モモはまたお花畑であそびます。
そのまま花のなかでおひるねすることもあります。
気がつくと、目の前にのぞきこむルーシーのかお。
いつだってルーシーは、どこかでモモのことをみつけて
おいかけてくるんです。

けれどいつのまにか、
モモはおいかけっこがたのしくなっていました。

そんなふうにしていく年ものときがすぎ、
ルーシーは大きくなりました。
もう、モモをおいかけまわすことなんてしません。
大人になったルーシーは、モモをみつめて言いました。

「わたし、遠くへおよめにいくの。
おわかれしなきゃいけないわ。さよなら、モモ」

ルーシーは、モモがびょうきになったときと同じ、
なきそうなかおをしていましたが、
モモにはどうしてだかわかりませんでした。

その日からルーシーのすがたは
みえなくなりました。
大きな家にモモはひとりぼっち。
いそがしいパパのかえりはいつもまよなかです。
モモは、まっくらなへやでひとり
すごすことが多くなりました。

そんな日々がつづき、
モモはふたたびびょうきになってしまいました。
からだが重く、思うようにうごけません。
もう何日も、ミルクさえ口にしていません。

パパがおくのへやで、だれかと話しています。
「もうねたきりでおきあがれないんだ」

モモは思いだしていました。
いつだったか、
ルーシーとねむったらげんきになったことを。

「そうだ、あしたルーシーをさがしにいこう」

そうきめたら、なんだかたのしくなりました。
モモがこの家にきて、15年の月日がたっていました。

ルーシーにあいたい。あいたいなぁ。
モモははしります。
重かったからだはかるく、
どこまでも行けそうな気がしました。
ルーシーはどこ？
おかしくて、ふしぎなきぶんです。
あんなにルーシーからにげていたはずなのに。
風のあいだを、けものみちを、
ルーシーをさがします。
はしって、はしって……

「モモ！」

なつかしい声にかおをあげると、
まっていたかのようにルーシーが立っていました。

ルーシー、さがしたんだよ。
ルーシー、どこへいっていたの。
ひとりぼっちでさびしかったよ。
やっぱりルーシーなんかきらいだ。

あのね、ルーシー、

あいたかったよ……

ただいちど、びくんとからだをふるわせると、
モモは目をとじ、
もううごくことはありませんでした。
けれど、かえってきたルーシーのうでのなかで
しあわせそうにねむっていました。

「あえてよかった、ルーシー」

きせつがめぐり、また春がやってきます。
ちょうちょもモグラもかおをのぞかせます。
そこにはもう、モモのすがたはありません。

けれどルーシーには、
花のあいだをたのしそうにかけてゆく、
いたずら好きなねこのあしおとが聞こえたのでした。